

書評

廣川洋一

『古代感情論：プラトンからストア派まで』

岩波書店, 2000.

鄭 英昊

本書はその題名にある通り、古代哲学における感情に関する論考であるが、その内容は単に感情の分析にとどまらない。むしろこの書のテーマは感情と徳の関係である。具体的な構成としては、プラトン、アリストテレス、そしてストア派の哲学についてそれぞれ、はじめにその感情論を、そしてそれに続く章で、その感情に対する考え方の下で感情と徳の関係がどのようなものであるかを扱うというものになっている。それゆえ、全部で六章の構成となる。この書を読むにあたっては、次のような問いを常に念頭に置くことが有益であろう。つまり、徳と感情はそれぞれの哲学において、いかなる論理のもとでどのような結びつきをもつのか、と。以下では、順を追って本書の概要を整理する。

はじめに、プラトンの感情論（第一章）。本書の全体に共通していることであるが、感情についての分析はやはりまず、それぞれの魂論において感情がどのように位置づけられているのかを問うことから始められる。例えば、プラトンの魂論においては、感情は魂の三部説の下で気概的部分に割り当てられ、非理知的なものとされている、というのが最も簡単な理解であろう。さらにこれによってプラトンが感情に否定的な評価を下したことについては、有名な詩人追放論の議論などからも明らかであろう。しかし、ことはそう簡単には終わらない。著者は、さらに徳との関係を見越して、感情と欲望の教育可能性に目を向ける。ここで注目されるのが、『ピレボス』におけるプラトンの理論の変化である。『ピレボス』において、感情と欲望はともにある種の知的な働き（思いなし、判断）を有しているという点で、「同列にある」ものとされており、このような理解の下では、プラトンが魂の二部分説を採用している、と主張することも可能であると著者は指摘する。そしてこのように知的な働きに与ることによってはじめて、感情と欲望は教育可能なものとなるので

ある。

以上のような感情論（あるいは欲望論）の下で、プラトンは、感情に徳との関係においてどのような評価を下したのだろうか（第二章）。ここで注意しなければならないのは、『パイドン』で見られるような、かなり厳密な態度で知を求める文脈ではなく（そこでは、感情と欲望は、それらから解放されるべきものとして、全く否定的に評価されている）、市民的徳と呼ばれうる徳、すなわち具体的には、勇氣と節制に対する考えが目下の考察の対象になっていることである。このような市民的徳の形成は、国家レベルでは重要なものとして評価されている。しかし、いかにして勇氣や節制という徳が可能になるのであろうか。ここにおいて、先に見た『ピレボス』における変化が重要な意味を持つ。両者はその根底に「思いなし」のようなある種の知的な働きを認められることによって、単に理知的部分の強圧的な支配に服するというのではなく、説得に応じ、教化されることが可能となるのである。そしてここにこそ、市民的徳が生まれる可能性が見出されるのである。さらに著者はこのことだけにとどまらず、エロースの階梯に関する記述において、感情としてのエロースが、知性におけるエロースと連続的なつながりを持つ点を指摘することによって、単に市民的徳においてのみでなく、真の徳への到達にも、感情が役割を果たすという点で、感情をより肯定的にとらえることも可能であることをも示すのである。

続いて、アリストテレス（第三章）。ここでもやはり、まずはその魂論において欲求的部分における感情がとりあげられる。しかし、アリストテレスの感情論において特筆すべきは、感情が対象と理由を持つとされていることである。例えば、アリストテレスは怒りに関して次のように述べている。「もし怒りがこういうことであるとするなら、必然的に、怒っている人はいつの場合も、例えばクレオンにというように、個人の誰かに対し怒るのであって、人間一般に対してではない、ということになるし、また、自分、または自分に属しているものに対して何事かがなされた、もしくはなされようとしたがゆえに怒るのだ、ということになる。」著者はこのような特質から、感情にある種の知的な作用（対象の同定や、理由をもつことに関して）が付随することを主張し、ここにプラトンの感情論との類似点を見出すのである。このような観点においてわれわれは、欲求的部分が分別に聴き従う部分とされていることを十全に理解することができるのである。

この理解を土台として考察されるのが、アリストテレスの「人柄としての徳」である（第四章）。このとき問題になるのは、アリストテレスが、徳と行為の間に選択という理知的あるいは自発的な契機を重視する点である。というのも、もし感情が全くもって受動的なものであるなら、そこにおいては、自発性が要求される徳を語る余地は生まれえないのではないか、という正当な疑問が生まれるからである。しかしながら筆者はこの「人柄として

の徳」は行為を繰り返し実践、習熟されることによってのみ形成されなければならないが、その作業の中に、帰納的と呼ぶことのできる（個別から一般への）理知的な働きを見ることで、選択概念に伴う理知的性格と「人柄としての徳」が相反するものではないことを示すのである。そして感情がそのようなある種の知的働きを受け入れることができるのは、既に感情の分析において見てきたような背景があるからこそなのである。われわれは感情を選択することはできないが、感情が行為につながるその関係において、理知的な選択を容れる余地を持つのである。そして、感情は中庸化されうる限りで、徳への積極的素材であり、「人柄としての徳」の成立の場となるのである。さらに著者は、アリストテレスもプラトン同様、欲望も感情と同じく知的働き、判断と無関係ではないとしていることを指摘する。このこともまた、アリストテレスとプラトンの共通点である。

最後にストア派の哲学（第五章）。著者はストア派の哲学としては、正統と認められる限りで後期のものも扱いながら論を進める。ところで、ストア派においてはこれまでの魂論に比して大きな転換点が見られる。それは、魂の部分説の放棄である。このような立場では、感情はこれまでのように魂の一部の働きではもはやなく、魂そのものの働きであることになる。このことによって、ストア派は比較的容易に、感情も理知的な働きによる（感情は暴力的な過度の衝動を引き起こす判断である）ことを主張しうるのである。さらに、ストア派の独特な根本教義（同意と衝動）との関係から、感情は受動的なものでなく、まさに「われわれの力のうちにある」ものとして扱われていることもまた重要である。しかしながら、このように魂論においても、認識論においても、明らかにプラトンやアリストテレスとは全く違った立場にあるストア派において、四つの基本「感情」のうちにすでに「欲望」を数え上げている点は興味深い。著者によれば、このことがストア派においていかなる論理の下で可能になったのかを示す資料は見当たらないらしいのだが、明らかに前の二者の哲学の影響を受けていると考えうるのである。

ところで、上のようなストア派の感情理解は、まさにストイックな徳論へと結びつく（第六章）。感情はそもそも魂の感乱した状態、病的な状態である以上、「中庸」などということとはそもそも許されず（ちょうどいい病気の状態などというものが考えられえないように）、根絶あるいは「治療」されるべきものとなるのである。そして、この「治療」の可能性は、既に感情が判断にかかわり、「われわれの力のうちにある」ものとされていたことから理解される。それゆえ、たとえばわれわれは、悲しみの原因となるものが本来、善悪無記なものであることを、そして悲しみを悪とする判断が誤りであることを悟らなければならない。さらには、災厄に対して「悲しむべきだ」という判断もまた誤ったものであるとし、放棄しなければならないのである。このようにして感情を完全に除去するもののみが、ほとん

ど到達不可能で理念的な徳（最高の善）を正しく知る「賢者」なのである。

以上のように、三様の哲学に関する論考が淡々と並べられたに過ぎないようにも見える本書においてもしかし、著者はそれぞれの哲学同士の関係をふまえながら論を進めていることが理解されるだろう。その中でもやはり注目すべきは、古代哲学において感情が単に受動的なもの、非理知的なものとされているわけではないこと、そして、それゆえに徳や行為との関連（もちろんここにおいてはそれぞれの相違が見られるのだけれども）を語ることができるし、語らねばならないものになる、ということである。このことは現代においても、感情や行為について考察するにあたっては、興味深いものとなるだろう。そして、ここに挙げられた哲学を専門的に研究するものにとっても、ほとんど知らない初心者にとっても、本書はそういった古代哲学の感情に対する態度を整理するのに有益であるし、このことはもちろんわれわれの思考を大いに触発するだろう。何より、そもそも感情について少しでも考えようとするものにとって、感情を語る際の背後にある論理（古代哲学においては特に魂論）とその論理のもとで感情に課せられてきた役割を知っておくことは、いつの時代にあっても不可欠であることは疑いえないはずである。

〔京都大学大学院修士課程・哲学〕